

1 今年（H28）の傾向

総評・講評（大問毎に）

【総評】

長文読解2題、対話文読解1題、和文英訳1題の構成であった。大問数およびその構成は例年通り。設問数は14で昨年と全く同じ。しかし、設問内容の変化により、問題全体が難化した。

第1問、第2問のそれぞれに、構造の分析能力と日本語の表現能力とが試される「長い下線部和訳」、および文脈・筆者の意図を正しく理解しないと解答できない「説明問題」が出題され、東北大学の英語入試らしさが全面にでていいる。また、第1問、第2問に客観問題も出題されているが、いずれも、単純な知識を問う問題ではなく、正答するためには文脈を正しく理解する必要がある。

第3問では、昨年同様英語による自由記述問題が出題されているが、解答には厳しい条件が課されており、合格解答を書くのは至極困難であろう。

第4問は例年通りの和文英訳であるが、課題文を英文にする前に、意味を咀嚼し、構造を丁寧に確認する必要がある。

総じて、文章全体の意図を把握したうえでの解答が求められており、細かな点に対する配慮と、全体を把握する広い視野が必要な良問であった。文章の内容としても、異文化コミュニケーション、情報の集め方とまとめ方、インターネットの利用法等、大学生活、研究活動をするうえで考えておきたいテーマを扱っている。問題形式、内容、ともに東北大らしい問題だったと言える。

【個別分析設問 I】

本文は、言語学の博士号取得を目指して研究をしていた筆者がオーストラリアに留学をした際に気づいた言語使用に関わる「発見」を述べた文章である。全体は7つの段落から構成されている。第1段落では筆者がオーストラリアに留学しようと考えた背景が説明されている。この説明が問1の下線部(A)の和訳に対応する。次に、第2段落と第3段落では筆者が母国ロシアの大学で多文化コミュニケーションの授業を通して学んだことが説明されている。問3はこの学んだことを筆者がどのように捉えているのかをヒントに考える問題である。続く第4段落から第7段落までではロシア話者とオーストラリアの英語話者との間の言語使用の違いを文化

や人間関係の捉え方の違いから説明している。問 4、問 5、及び問 6 はいずれも筆者が直面したこの違いを理解した上で解答することを求めている問題である。

問 1 は英文和訳の問題。5 行に渡る長い一文の構造を正確に把握できるかが問われる。主節(1)、because から始まる従節(2)、which から始まる関係節(3)の 3 つの部分から構成されている。順番に見ていこう。(1)主節は主語 The experience and knowledge、動詞 built up、目的語 my belief で構成されている。I gained in 2002 は関係詞 which が省略されており、先行詞は文の主語 The experience and knowledge。また、that studying...an ideal step は同格の接続詞 that から始まる節で my belief の中身を述べている。(2)because...via English は主節に対する理由を表すひとまとまりの従節。節内の主語 it は主節の studying in Australia を指す。また、which are native and dear to me は動詞が複数形 are となっていることから the Russian language and culture を先行詞にとる。via...は「～を通じて」の意味。(3)関係詞 which が非制限用法(継続用法)であることからこの部分は補足的に後で訳す。which の先行詞は直前の English。この部分の時制が過去完了 had been になっていることにも気をつけておきたい。

問 2 は空所補充の問題。設問文で「前置詞」というヒントが与えられているので、直前の動詞もしくは直後の名詞・動名詞との関係性から適語を判断する。1カ所目の(X)を含む文の意味は「多文化コミュニケーションに関する大学の授業に出ることを通してロシア語話者としてのアイデンティティならびに私の英語理解の新たな境地が開かれた」。経過・過程を表す前置詞が入る。2カ所目の(X)を含む文の意味は「オーストラリアのような多文化社会を初めて訪れる人はみな同様の課程を履修すべきだと私は強く思っている」。直前の動詞 go と合わせて「経験する・通り抜ける」の意味を作る前置詞が入る。3カ所目の(X)を含む文の意味は「ロシアではバスや職場、家庭で頭痛についての不満を聞かないで過ごせる日はただの一日もないのだが、その一方でオーストラリアでは人々が頭痛についての不満を訴えるのをほとんど聞いたことがなかったことに気づいた」。直前の動詞 get と合わせて「時間を過ごす」の意味を為す前置詞が入る。4カ所目の(X)を含む文の意味は「オーストラリアでの生活を通してようやく私はロシア語を話す社会では自分だけで物事をなすよりも他人と一緒に物事をなす方に力点を置いていることを理解するようになった」。強調構文であることに注意。強調されている(X) living in Australia が経過・過程を表す副詞句になっている。以上の(X)に共通する前置詞は through で

ある。

問 3 は同義語を本文中から探す問題。下線部(B)revelation は文の補語であることから、まずこれに対応する主語 the idea に注目する。the idea の内容は「様々な文化集団が言葉を話す際の違いは、考え方や世界観の違いによって決まるという発想」。筆者がこの the idea を自分にとってどのようなものとして捉えているのかを段落全体の文脈から読み取る。

まず、この段落は冒頭の my new level を説明している箇所である。段落前半では大学の授業を通して学んだことを述べており、段落後半ではその帰結として、こうした多文化コミュニケーションの授業を受けるのが望ましいことを主張している。それゆえ、大学の授業で学んだ the idea は筆者にとって「新しい考え方」すなわち「発見」であったことが推測できる。

次に、第 4 段落から第 7 段落までではオーストラリアでの生活を通して筆者が新たに学んだことが述べられている。そこで、この範囲の中に、下線部(B)に相当する表現があるのではないかと当たりをつける。そうすると、第 6 段落の第 1 文でオーストラリアで生活するまでは気づかなかった its invisible boundaries の「発見」が挙げられている。正解は discovery。

ちなみに下線部(B)の名詞 revelation は「暴露、思いがけない事実、啓示」の意味を持つが、この単語を知っているかどうかを試す問題ではなく、あくまでも文脈から語句の意味を類推する問題である。センター試験の語義類推と同じ問題設定だと理解しよう。

問 4 は空所補充の問題。段落全体で展開されている対比に注目する。空所のある第 4 段落では、ロシアの人々は頭痛についての不満をよく漏らす、オーストラリアの人々はそうではない、という対比が述べられている。そこから当該の文の people here がオーストラリアの人々を指していることを見抜く。このように類推できる根拠は 2 つ。第一に、ロシアの人々を説明している前文が過去時制であり、当該の文は現在時制であるという対比が表現されている。第二に、オーストラリアで生活をしていたときに気づいたことを述べている文脈なので、筆者は「いま」自分がオーストラリアにいる、という意識でこの疑問を発している。したがって、「ここ」=オーストラリアの人々がロシアの人々に比べて頭痛に悩まされることが少なく、頭痛について話題にしない、という文意が読み取れる。したがって(1)less、(2)less となり、選択肢(d)が正解。

問 5 は英文和訳の問題。関係詞 which の訳し方が鍵になる。文の主語は The strong

expressions、動詞は met with、その目的語が silence or disapproving looks という基本構造をまず確認する。I used は関係詞を省略しており、先行詞は文の主語 The strong expressions である。meet with...は「.....に出くわす」。副詞 sometimes は一般動詞の直前に置かれるのが通例であるから met with を修飾していると考え。問題は silence or disapproving looks を先行詞とする which から始まる関係節の訳し方。カンマが入っていないが、制限用法（限定用法）として関係節から訳し始めると文意がわかりにくくなる。ここは、非制限用法（継続用法）のように、関係節を後ろで訳出するのが良い。というのも、関係節内の助動詞 would は過去の習慣を表しており、「強い表現を使う」、そうすると「沈黙や不満気な様子をもって迎えられ」、それによって「.....に気づかされることがしばしばあった」という出来事の前後関係を和訳で表現する必要があるからだ。

問 6 は抽象的な下線部が意味する具体的な事柄を説明させる問題。第 6 段落と第 7 段落における抽象→具体の論述展開を見抜く。下線部(D)は「アングロ系文化における個人の自律という考え方」という意味だが、下線部そのものの語句の意味がわからなくても、設問文の「暗黙のルールを二つ」答えよという要求が解答のヒントになる。一つ目は第 6 段落でオーストラリア人の友人の言葉 Never say things...とそれを受けて筆者が I decided not to use a straight imperative と述べているところから「非常に親しいのでなければ命令文は使うべきではない」というルールを見出す。二つ目は第 7 段落で the need to keep asking whether...と述べているところからルールが見出せる。

解答を整える際に注意したいのは「暗黙の」ルールという点だ。問 3 や問 5 でも問われていたが、筆者がそれまで知らなかった（気づかなかった）考え方や言語使用を「発見」したというのが本文の趣旨である。したがって、オーストラリアの「暗黙のルール」も、ロシアの言語や文化に慣れ親しんでいた筆者が「発見」したものと位置づけられる。この観点から、ロシアとは異なるものとして筆者が感じたオーストラリアの背景を踏まえた解答を作成できると良い。

【個別分析設問Ⅱ】

物語と科学の関係に関する文章。和訳 1 問、文章中の並べ替え 1 問、日本語による説明 2 問。

問 1

設問 I と同様に、長い文が和訳として出題されているため、修飾関係を的確に読み取り、なおかつまとまった日本語に訳す力が求められる。まず、主語である **people** を **asked to describe ~ a screen** が修飾している。**moving about** は **moving around** と同様の意味で、直前の **geometric shapes** を修飾している。後半部分の **that** 節は **language** を修飾する関係代名詞節。**language** は無冠詞単数で使われており、また文脈からも「言語」ではなく「ことば」「言い回し」などと訳す。**attribute A to B** 「A を B に帰属させる」を文意に合わせて訳出する。**as if**+仮定法の部分と、それに続くコロンのあとの引用符で示された部分も、**language** の、すなわちどのような言葉/言い回しで **describe** したかの説明に相当する。

問 2

指示語の指示対象、具体例の前後関係、副詞の機能に注意する。**a** の **these stories** は **b** の **a large chunk of mythology** を指す。したがって、**b→a** の順序が決まる。**c** の **and yet** は「それにもかかわらず」の意味で、**a** の、気象現象を現代的に見る内容に対して、**c** の、宗教的な見方をする内容をつなぐ役割があるため、**a→c** の順序になる。

問 3

日常生活においてだけでなく、科学においても物語が持つ意義を説明する。物語がどのように役立つかについては本段落中ほどから説明がある。**the colorful and specific stories⇒these⇒They** と言い換えた、**They help fix** 以降に着目する。さらに本段落最後の 4 行ほどに、**Galileo** と **Newton** の **stories** が **one of the key early stories** を **bring home** するのに役立つとの、まとめがある。

問 4

物語の力は科学においても有益であることを問 3 で確認したが、それに頼り過ぎるのは良くないことを述べた内容を読み取る。**temptation** 「誘惑」に **resist** 「抵抗する」とはどういうことなのかを解答として表したい。下線部の **Some sciences** の具体例は、**Evolutionary biologists** と **medical and psychological research** のこと。物語に頼りすぎると「進化は、ある目的に向かって進む」と考えたり、「相関関係は因果関係である」と考えたりするが、進化生物学や医学、心理学の世界はそういった考え方に抵抗しなければならないのである。

【個別分析設問 III】

ガラケーとスマホのメリット、デメリットについての JASON と EMILY の会話を読んで設問に答える問題。問 1 は発言内容と一致するものを選ぶ選択問題で、8 つの選択肢から 3 つ選ぶが、それほど難しくはないだろう。問題なのは問 2 で、英文で書かれた設問の指示を正しく読まないと、せっかく解答を書いても、0 点になる恐れがある。また、後から設問のワナに気づいても、時間が足りずに書けない恐れもある。

問 1 いずれも EMILY の発言内容と対応している。(2)は It seems like they are even losing the ability to communicate directly with others に対応。(3)は They are such a waste of time. と People are either playing or ...に対応。最後の 1 つだけが、多少判断に迷うが、People are either ... trying to keep up with all of the social media messages と I am sure that you have had the experience of people paying more attention to their smartphones than to you.に対応していると考えればよい。

問 2 スマートフォンが時間を節約してくれると思うか、それとも時間を無駄にすると思うかを、少なくとも二つの理由をあげて英文で答える自由英作文問題。ただし条件があって、会話文で述べられていない理由を自分で考えなければならない。

「時間の無駄」の理由として本文で、ゲーム、ソーシャルメディアが述べられ、「時間の節約」の理由としては、図書館代わりが述べられているので、それ以外の理由を書く必要がある。一例としては、「時間の無駄」の方は、①必要以上にネットに時間を使うこと、②同じことを繰り返し調べるなどが考えられ、「時間の節約」としては①地図機能や②チケットの予約などが考えられる。

【個別分析設問 IV】

出典は、松田美佐『うわさとは何か—ネットで変容する「最も古いメディア」』。昨年同様、部分訳 2 問の形式。昨年は比較的書きやすかったが、今年は表現に工夫が必要な個所が多く、

受験生はかなり苦戦したのではないか。

(A)前半は「～として『…』と批判される」を criticize O as … because SV～ [for ～]を受動態にして表現する。「うわさの巣窟」は a den [haunt] of rumor だが、den も haunt も受験生の語彙を超えているので、the breeding place of rumor / a nest of rumor などと工夫する必要がある。理由の部分は there is か there are か迷うことになるので、it has ～を用いるか、for+名詞を用いるとよい。「ウソの」は lie ではなく false。後半の文の「～をかんがえると」は given ～ / considering ～。「そう簡単には賛成できない」は I cannot agree with this view so easily のように直訳するのではなく、「必ずしも～というわけではない」などの部分否定を用いて工夫して訳した方がよい。

(B)「～するにつれ」は比例の接続詞 as を用いる。「これまでのマスメディアが中心であった」の部分は、限定的には表現しづらいので、関係代名詞の継続用法, which ～で説明するのが一番ふさわしい。ここは受験生が苦手に行っているポイント。「それによって」は and thereby でつながるか、文を切って、Accordingly とする。「変わる」「変化する」も今回の文脈では表現が難しく主語を何にするかで表現が変わってくる。表現の工夫は解答例を参照のこと。

2 合否ライン（予想）※他の教科が合格ラインをとったときの得点（％）予想

【文系】

文学部	60%
教育学部	60%
法学部	65%
経済学部	60%

【理系】

理学部	70%	歯学部	70%
工学部	70%	薬学部	70%
医学部	75%	農学部	70%
保健／看護	60%		
〃 検査	60%		
〃 放射線	60%		

3 来年受験する生徒へのアドバイス

大きな構造を正しく把握し、それを表現できる能力が求められている。

和訳問題においては、関係節の限定用法と非限定(継続)用法の使い分け、関係詞の省略、分詞による後置修飾、無生物主語構文等の重要構文を、どんなパターンで出されても対応できるようにしたい。構文を精密に分析し、かつそれを誤解のない表現で解答用紙に書かねばならない。

説明問題に関しても、該当箇所を探すことができるようになるのは当然として、読み取った複数の情報のうちどこに力点を置くべきかを、文章全体の意図から探り出す能力も必須である。

以上の能力を磨くため、日頃から英語、日本語を問わず(長い)文章を読む習慣をつけ、情報を整理しながら文脈(筆者の意図)を把握する練習をしたい。また、解答を書く力をつけるためには、指導者に添削してもらいなどして、そもそもの表現能力を磨くのはもちろん、自分の書いたものを推敲する能力も磨こう。文脈の中で構文や語句の意味を正しく把握できるよう、丸暗記による1対1の知識を増やすだけでなく、類義語、類似表現などを整理して、他との関連の中で知識を増やしていこう。